

まえがき

公文書館専門職員の養成・研修をめぐって

アーキビストの専門性をどのように考えていくかとの問いに対して、豊見山論文と福島論文から学んでみたいと思います。アーカイブズが集団の記憶装置になぞられるなら、集団の記憶喪失、健忘症にならないための仕組みとしてアーカイブズをとらえることが可能です。そこでのアーキビストの使命は、「公文書館資料が過去の証明として信頼できるものでありつづけることを保証すること」と豊見山氏は述べています。福島氏は、特に歴史研究者との関係に着目して専門性を展開しています。

このようなアーキビストの専門性をどのように身に付けていけばよいのでしょうか。中島報告は東アジア地域で長年の懸案だったアーキビスト養成コースが昨年度開講し、これへの参加を通して得た体験談を報告しています。小原報告は、アメリカとフランスの対照的な養成のあり方を詳細に報告しています。現在、国内でもいくつかの大学院のコースが試みられています。各公文書館が専門職員を独自に選考採用することももっと拡がってほしいものですが、その一例として最近の国立公文書館の事例を報告しています。

アーキビスト問題については、地方公文書館の館長の立場から小谷氏に議論の端緒を示していただきました。梅原報告では地方公文書館の職員状況を紹介していますので、組織・定員状況と合わせて検討していただきたいと思います。

アーカイブズの現場で、苦闘している仲間から共に学ぶことができたらと考えて今回の特集といたしました。